

曲目解説

# Partita No. 1

## パルティータ第1番

Johann Sebastian Bach（1685–1750）　ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

曲目解説

# Partita No. 1 パルティータ第1番

Partita No. 1 in b minor for Solo Violin, BWV 1002 ／ 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第1番 ロ短調

**Johann Sebastian Bach（1685–1750） ヨハン・ゼバスティアン・バッハ**

| | |
|---|---|
| **作曲** | 1720年までに（ケーテン時代） |
| **原曲の編成** | ヴァイオリン1本（無伴奏） |
| **調** | ロ短調 |
| **楽章** | 4つの舞曲と、それぞれに続くドゥーブル（変奏）の、全8楽章 |
| **この楽譜** | Mutopia Project（Erik Sandberg 浄書、パブリックドメイン）の楽譜に、篠笛の運指を付記。<br>楽章ごとに1冊 |

## 作曲者

ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、ドイツ中部のアイゼナハに、代々音楽家を出した家に生まれました。
ヴァイマルの宮廷オルガニスト、ケーテンの宮廷楽長を経て、
1723年からはライプツィヒの聖トーマス教会のカントル（音楽監督）を務め、その地で生涯を終えました。

ケーテンの宮廷（1717〜23年）は、礼拝に手の込んだ音楽を用いない改革派の宮廷だったため、
バッハはこの時期、器楽曲に力を注ぎました。無伴奏ヴァイオリンや無伴奏チェロのための曲、
『ブランデンブルク協奏曲』、『平均律クラヴィーア曲集』第1巻などは、この時期に生まれています。

生前は、作曲家としてよりも、オルガンの名手として知られていました。没後はしばらく忘れられましたが、
1829年にメンデルスゾーンが『マタイ受難曲』を蘇演したことをきっかけに、19世紀に再評価が進みました。

## 曲の成り立ち

1720年にケーテンで清書された自筆譜『伴奏の低音なしの、ヴァイオリンのための6つの独奏曲』（Sei Solo à Violino senza Basso accompagnato）に収められた曲です。ソナタ3曲とパルティータ3曲が交互に並び、
重音や分散和音を使って、1本のヴァイオリンで旋律と和声の両方を表すように書かれています。

パルティータは、いくつかの舞曲を組み合わせた組曲のことです。第1番は、
ほかの2曲のパルティータと違い、4つの舞曲のそれぞれのあとに「ドゥーブル（Double）」が続くという、
珍しい作りになっています。

ドゥーブルは、もとの舞曲と同じ和声の流れの上に、細かい音符で新しい旋律を織り上げた変奏です。
舞曲のあとにドゥーブルを続けて聴くと、同じ骨組みから、まったく違う景色が現れるのがよく分かります。

## 曲調と聴きどころ

舞曲の本体には重音（和音）が多く使われ、ドゥーブルは、主に単音の連なりでできています。
笛で吹くには、単旋律のドゥーブルが、とくに向いています。

## 曲の流れ

| 楽章 | 内容 |
| --- | --- |
| I・II | Allemanda（アルマンダ）と Double。「ドイツ風」という意味の、ゆったりした4拍子の舞曲。付点のリズムが重々しく、厳かな始まり。ドゥーブルは、その骨組みを、途切れない細かな音符の流れに変える |
| III・IV | Corrente（コレンテ）と Double (Presto)。「走る」という意味の、速い3拍子の舞曲。ドゥーブルは Presto（きわめて速く）で、細かな音符が一気に駆け抜ける |
| V・VI | Sarabande（サラバンド）と Double。スペインに由来する、ゆっくりした3拍子の舞曲で、2拍目に重みがかかるのが特徴。重厚な和音の本体に対し、ドゥーブルは3つずつまとまった音符が、なめらかに流れる |
| VII・VIII | Tempo di Borea（テンポ・ディ・ボレア）と Double。「ブーレの速さで」という意味の、快活な2拍子。ドゥーブルは、切れ目のない8分音符で、組曲を力強く締めくくる |

## 音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

### 調　ロ短調

シを主音とする短調で、調号は♯が2つ（ファとド）。

### 拍子　楽章ごとに違う

アルマンダは4分の4拍子、コレンテは4分の3拍子、サラバンドは4分の3拍子（2拍目に重み）、
テンポ・ディ・ボレアは2分の2拍子です。

### ドゥーブル（変奏）

舞曲のあとのドゥーブルは、同じ和音の流れを細かい音符で飾ったものです。
舞曲とドゥーブルを続けて吹くと、同じ骨組みから違う景色が生まれるのがよく分かります。

## 篠笛の楽譜と調について

同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

| 楽譜 | 内容 |
|---|---|
| **標準の運指版** | ロ短調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。 |
| **六本調子版** | 六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。ト短調（原曲より長3度下）、チューナーの基準A＝431Hz（全体を45セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。 |

藤舎名玄　2026